写真メディアにおける物質的想像力
——加速への抵抗として

東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現科
学籍番号 1317926
王憶冰

要旨

「かつて、あった」という写真の本質は、デジタル時代になって変化し、「写真的イメージ」の流動性、断片性、多重性に直面するだけでなく、常に更新される視覚的現実、あらゆる光学芸術の絶え間ない収束に直面している。これらのハイブリッドなイメージは、新しい知覚となり、私たちの世界に対する認識を形成していく。近年、写真の物質性への注目が高まっていると言えよう。その流れの中で、現代社会に見られる非物質的性格と、写真における物質性の強調の関係を考える上で、現代フランスの思想家ポール・ヴィリリオの理論は特に重要であると考える。

「速度」は、ヴィリリオが提唱する重要な命題である。彼によれば、テクノロジーはスピードの表象に過ぎないが、スピードはテクノロジーの本質である。現代社会はあらゆるレベルで加速しており、その加速が高速に入ると、現代人はそのスピードに包まれて孤立し、安定した形で触れたり知覚したりすることができなくなるという。周囲の世界との関係が変化し、もはや物質的に密接な関係を維持することができず、不安定で非物質的なつながりしか持てなくなってしまうからだ。最も直接的な感覚は、自分自身の連続性の頻繁な中断、ショックとペースの変化の繰り返しの経験、視覚的次元の頻繁な更新と通過、そして外界の非物質化と仮想化だ。本論では、「加速」がこのような変化をもたらす原因であるという仮説について述べようと思う。そこから自作を考察して、写真イメージを物質的なメディアに受容するという制作方法を解説する。その行為は、物質と触覚的な経験を通して身体性を回復するためでありながら、「加速」への抵抗であると本論の主張である。

第 1 章では、現在、私たちがどのような画像を写真と考えているのか、また、どんな社会的背景がこのような状況を生み出しているのかを問題とし、その背景について述べた。私たちは今日の「写真」という言葉をハイブリッドなイメージとして指すが、写真の透明性の喪失は、このハイブリッド性だけでなく、私たちの社会の変化、デジタル技術の社会の形や「イメージ」との関わり方、世界との関わり方を根本的に変えてしまったことに起因すると考える。現代社会では直接的に存在するすべてのものが表現に変えられ、風景は私たちの消費の主な対象となり、デジタル技術は私たちの認識を再構築することで私たちの現実を変えている。ヴィリリオの速度理論は、この変化の核心である加速による「身体の喪失」を指摘するものだろう。

第 2 章では、そのような現代において、ヴィリリオが提唱した「消滅の美学」を解説した。加速によって、人々はテクノロジーを通して世界を認識し、テクノロジーによるこの認識方法は「消滅」を提示する。「消滅の美学」とは、したがって、加速の中で生まれてくる美学である。加速するテクノロジーは、人々の知覚システムを変化させ、時間、空間、現実の知覚に変化をもたらし、ショック、めまい、パニックなどを伴う美的体験をもたらす。ヴィリリオによると、「消滅の美学」が伝統的な芸術と新興芸術の境界であり、現代では、アナログ画像を特徴とする安定した静的な「出現の美学」から、網膜上で存続したり消失したりするデジタル画像を特徴とする「消滅の美学」に変化したと示している。素材の永続性が視覚の永続性となり、芸術の形態が変化し、伝統的な芸術の境界が消え始め、絶え間なく続く「無辺の芸術」へと向かっていくのだ。このような状況で、身体性を回復するため「出現の美学」へ移行して、物質の重要性を再喚起する必要があると考えられている。

第 3 章では、前章の内容を踏まえて、ガストン・バシュラールの物質的想像力論と関連しながら、自作の考察を行う。私は石、水、蝋など、触覚的に手応えのある物質を写真のメディアとして使っている。イメージを物質的なメディアに定着することによって、視触性を持つことになり、イメージが物質の表面に浮かんでいるが、物質の性格がイメージの奥までに染み込んでいく。そのような「消滅」に対する「出現」を、スピードへの抵抗として追求するものだと私は考える。この行為に求められるのは、自分の存在を身体で確認すること、現実世界とのつながりを確認することだ。

デジタル技術によってより「加速」している時代において、イメージは本体を失い、視覚だけ残って、網膜上で発生するものになっている。このようなイメージの力に影響され、支配されている私たちは、身体性を喪失し続け、世界とのつながりが薄くなっている。物質は世界とのつながりを喚起することができる、自然物質の奥底から私たちの意識に課せられた力に由来している。写真イメージを物質的な形で提示することが、加速するプロセスに抵抗することはできないかもしれないが、その意志が重要であることに変わりはない。